

翻
刻

『稲葉
佳景
無駄
安留
記』

法
美
郡

- 一、私に句点、濁点を加える。原本のどこどこに濁点が加えられているがそれらの区別はしない。
- 一、漢字・仮名とも、原則として現在通行の字体に統一する。
- 一、文字の大小の比率、配置は原本と異なる。
- 一、改行は、上巻・下巻は原本のまま、拾遺巻は原本によらない。
- 一、手擦れ・重ね書きなどによって判読できない文字は■によって示す。
- 一、字形は明確であるが、判読できない文字は□によって示す。
- 一、判読に疑問のある文字は「」でくくる。
- 一、絵とその題を四角の枠内に掲げる。配列は原本に従う。絵に書き加えられている説明のうちの主なものも枠内に記す。

法美郡

【上巻】

【上五五表】

法美郡

矢津村 稲葉天社 祭神 倉魂 武内大臣三韓征の御簾

を取めたまふと也。かみさびたるさまいとたふとし。老松茂りて寂寥として閑静なり。秋風紅葉を散すもむかしのおもひにて

秋風に木々の錦をなびかせて

今も御旗の色を見せ覺

同 竹島山松雲寺 祭神 天満宮 社頭 梅泉水金魚面白し。

縁起は拾遺に審なり。

人ならば罪にあつらむ神垣の

梅が香ぬすむ夜の山風

同 稻荷明神 石磴高く秀たる社頭なり。

如月やいなり祭りも今こんと

ないてよろこぶ子狐の声

同 滝山耕月寺 禪宗 閑静の地なり。風景無双耕月橋

小流にかけたり。尼寺也。

すき通る田毎の影を見し人や

月の耕す寺といひけむ

同 安禪寺 律 遊行上人を案内する寺なり。門前並松

を植。鐘樓夕陽に赫々として美麗の梵宇なり。

同 ヘタネ阪 奥在所の人黒木をひさぐに此阪を通れり。

是宇倍の山口なり。

赤色の柿のへたねを帰れるは

黒木も貌もうれたとぞ見る

同 宇倍の三度栗 燕栗^{サヘグリ}にして味美なり。名物とす。是山中

栗多く又因幡山の松とて歌にも読り。行平卿の故事也。

夜をひるにつゞれ着て採^トるいが栗の

いかにつかるゝ賤が業かな

それより百町ばかり野を経峯を越て 杜若^{カキツバタ}の沢にいたる。

二三の沢あり。五月には花全盛^{サカンナリ}。諸人賞観^{シヤウガン}す。最色香ふかし。

中秋の頃四季咲の花を尋しに村童曰^ク「さいつころならばありしものを時おくれにけり」と。聞て本意なく空手にや帰るらむと思ふ

折から或老嫗の彼是の家にゆいて求めよと教へにかゆきかく

ゆきて漸く二三花を手にいれて

既^{スデ}の事赤き辱^{ハチ}をばかきつばた

花にゆかりの人のくれずは

帰るさの路谷水のぬかるみにすべりて彼瓢をころぼして酒

をこぼす。嗚呼士卒を恵むともなき身の溪水を洒臭くせし
はおろかなりとて

孝行の人もとぞ思ふ溪水に

こぼせし酒のおしきあまりに

松風村雨古墳 沢に往みちの辺に五輪を重たり。

稲葉天社

稲荷社



竹島山 天満宮



同 滝山 耕月寺



同 卯垣 安禪寺

同・・・安禪寺

宇倍山口

ヘタネ阪



宇部杜若沢

カラ川村

松風村雨墓

百谷柳原寺

柳原卿古墳



法美郡

同宇倍野神社 是龜谷也。武内大臣宿称は当国主の始

にて双履を措て其御隠処を不知。其跡に祠を建て祭る。一の宮

なり。是稲羽山にて代々国主の府なり。

宇倍の山みたに、残る白雪は

神のしら髪や削こぼちけむ

山上に を祭る。

総て野山にて霽やかなり。暮春廿一日祭には老若群集して山谷に宴。
木の下にひさごならして遠近の

花もさけとぞおもふころかな

同卯垣爵山城跡

是天正年間

在砦の墟也

と。今も其形見る。昔は稲羽川此下に漲て吉方観音の辺
に至り夫より鳥取山下に到り深沼となると。此辺今も低し。

同安禪寺は 是遊行上人導の寺。門前並松蒼々。

赤鐘楼。堂宇莊嚴尤美也。常念仏なり。大鉦を打て市中を
修行する。

○百谷村柳原寺 是安德帝遷幸時、柳原大納言量光卿

夫婦同弟某卿当村 家に止宿。于時重病にて夫婦共

逝去。墳は後山谷に在り。後寛永の頃国主光政公の命を受て

紫沙門提宗和尚寺を再建す。本尊薬師観音勢至

其外仏像を安す。又山叔塗の杖あり。額は花静至上方結

月と書。花押は木庵瑠印○正榮永昌木庵書。何世の遺跡に

や。

石垣高く梵于美麗なり。弘善寺末。隱居地とするよし。

あまさがるひなにありても錦なり

桃のたになる柳原寺

同

利右衛門の家^ニ秀吉より頂戴の鎧挟箱を所持する郷民あり。
是往古大臣の臣^{ナコシ}なりし由。

桃谷の家の鎧をきて見れば

さねもかたくておどし色よし

同

吉野邑

土堂薬師 今は堂鐘ばかり残る。縁起は拾遺書詳なり。

往古は加藍なりし由。木仏破壊したる数多納る。前に積たる石

は宝経塔五りんの崩なり。是国峯の路にてこゝより宇倍の

越して山谷の嶮難を経て彼荒金山上に到る。依て吉野と称す。

国峯のみちさえ絶て降雪の

花に埋るゝみよしのゝ寺

吉野 土堂薬師
宝塔五輪石

文治五年歟
平相国清盛
内室二位ノ禅
尼開基而大
伽藍之跡也。
是再建立也。

旧ハ和銅二ノ
年秋当国
加路住伏野氏
建立。花度山光
良寺、号。国中
第一ノ大梵宇。

第一ノ大梵宇。



甕山岩 甕山
山中鹿之介
此山を脚だま
りとして七
度返して戦
し址なり。

是尼子
家の長
臣にて幼
主を守
護して

苦戦せし址。
武田美作守
を討亡したる
時桶籠岩也。

宇倍神社

宇倍野



荒舟崩御宮

武王大明神ト崇ルハ社
地ニ拠テカ。
馬調場

エボシ岩
寺跡



岡益山上

石堂路

此平地昔ノ寺跡也。

辻堂 薬師仏

安德帝御陵 鐘

新井石舟



十石邑 普眼寺

楠城邑

扇峯



同

岡益邑山上

堂宇はなし。今は山下森中に仁王の壞朽たる五尺許の物在し由。見不

安徳帝御陵

俗称石堂。

此陵後に五輪数多。緑苔

の中に破壊したり。是咸公卿の古墳なり。麓は松柏鬱茂

たり。草庵に古仏を安堵す。前に梟鐘を掲る。旧寺の遺物。

西の空にほのめくと見し月影の

入にし山の草を露けき

崩御のみやの秋の夕べは

是荒舟より登れば凡廿町余。山頂蒼々として松柏森々たる中

央に僅に茅□の中小祠鎮座。側に烏帽子岩あり。まことに蕭然セウた

るさまは袂を濡す。此地を少し下れば山間より遙に海辺眺望の

所あり。是や往古君海上翫覧ありし処なりと。此の地の後の峯

を越れば即姫路邑なり。

同

新井石舟

是二位の尼君の古墳。

嗚呼悲嘆すべし。星霜つもりて大破せしを視露ミアラワして石

船などの俗称は何人かいひけむ。或は此中にて脚を洗へば

雨ふりしなど法外のふるまいなり。

波あらし西の海にや君こりて

石の御舟に身をかくしけむ

同

梶原橋

是平氏の殘党を追討の滞陣せし時被掛也と。

拾遺に悉細を記す。

二度がけか三度がえしか知らねども

是梶原のかけときしはし

同

荒舟山上

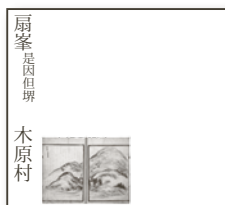
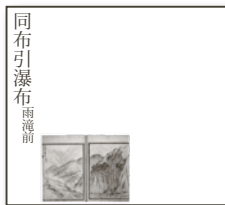
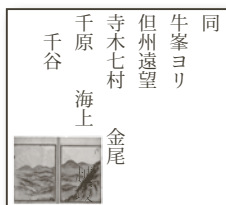
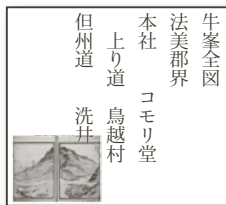
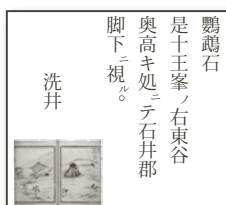
崩御宮

安徳帝姫路の皇居より此地に遷幸ありて崩御したま

ふ址なりと。于今彼岸の初日を以て祭日としける。姫路の宮

も同日なり。

あはれなり薄の波もあら舟の



同 子守権現 是上荒舟に祭る。

諸人乳のなき女の為に祈るよし。社頭美麗なり。老樹森々として後に溪水数百丈の下を流る。佳景なり。

風の手には椎や櫟を落されて

啼子を守る広前の狙

同 十石邑 普眼寺 往古二階堂入道の守本尊一寸八ぶの

観音の像を安置。是神護^{カンゴ}邑の土中より掘り出す所なり。

街道の右方山奥の平地にて大寺なり。

十石の寺の鐘搗こゝろせよ

六十刻の春の入相

同 布引瀑布

是雨滝の前にして岩壁をつたふ。実に細布^{タツクリ}をのべし如く

早^{ヒデリ}にも水勢滅せずして連々たるよし

香久山のむかしは知らず山姫の

いつきて見てもさらす布かな

同 筐滝^{ハコ}

是雨滝の路より右の上人跡絶たる深山にて山路より遠望するにまことに白き階^{キザハシ}の如し。是筐段滝歟。

浦嶋がはこたきなれや花の紐

解てみながら白髪とぞなる

同 雨飛泉

老樹蒼翠の中を過て往ば常に雲霧不断夕陽映じて

傘の如き虹をなせり。巉巖百丈の上より玉泉雨の如く漲落る。滝の頭総て岩峻て水際に路ありて裏を見らる。

すさまじきたきの音には山狙も

梢にほせる肝やつぶさむ

此瀑布の奥に比丘尼滝・樋滝・茂平滝トテ在由。

十王峠へ越る右の山路を攀踏^{ヨヂノボ}ること数町。

同 鸚鵡石^{フヘム}

俗称石牛とは非なり。是十王峠の道より谷を越て茫々たる曠野なり。是上淵とて昔長者の居処の

址とかや。此石を十間計はなれて鏡岩とてあり。

是を搗^{モノイ}て言ば応ず。奇岩なり。洗井・鳥越など

遠見あざやかなり。

問^トふ人の言にたがはぬこたえこそ

いしも心は和^{ヤハ}らなりけり

同 強盜岩窟^{ガウトウガイワヤ}

鸚鵡石より下にて覆ふたる岩下に五六間の穴

居あり。むかし賊徒住たるよし。

今も尚つみは許^{ユル}さで蔦かづら

からみつけたる盜賊の岩

同 扇峯

岩井谷邑より登れば近し。是因但の堺。当国嵩山の冠たり。法美郡但州堺。

仰ぎ見る扇の峯の月影は

手に取るばかり涼しかり覺

同 十王峠 法美岩井の郡堺にて銀山の方路嶮し。

山王の猿もごわうの牛の子も

力まけたる十王のみち

【下巻】

【下 四九表】

法美郡余戸村風宮祠 衆人信仰す。祭神少名彦名神。

石磴老杉中ニ鎮座。

同 古墳 社より一町余奥なり。明治始村民此処ニて松根を掘とて古き塚穴の蓋に当れり。内を窺へば大白骨大口を開て座せり。凡七尺許の大男の骸ニて武具は朽たれど大劔在り。是何世の人ならん。想ふに兩刃の劔は蓋上代の物也。 始て 作りし

より片刃と為りぬ。然らば此時代より前の人なり。上代の武臣たること必せり。此骸の腹とおぼしき処に掌に余る程の囊の物ありて和らかなり。何物とも不知。奇なりと。公に訴へ又本の如に瘞埋けり。



法美郡 正蓮寺村

多門寺 毘沙門天王 毎年三月会式

つかひたまふ百足より猶会式には

人脚多ふきびしやもむ参り

同 奥 草庵ヲ建ル

若樹桜 近年天保の頃植し処。此地閑静にして実に
世外の風景あり。

去年よりも其俣敷ておく山の

桜が下の苔のさむしろ

同 紙子谷 イガミヌ 意上奴神社

是幽谷森々たる老樹の中に鎮座。蔭々として容易入りがたし。

溪水の右の高みに社頭。真に怖しき幽谷なり。古来妖怪有とて
タヤスク容易深入する者なし。

ツノ角文字のうがみの森に風荒れて

鬼罵までもきばをならせり

同 三本松 阪中に旅客腰をかけると腹痛する石あり。是殺生石

の「碓」なりと。衆恐れて近くよらず。是作州勝山玉藻石の種哉。

両介が狩さえせねば夏竹に

かくろふ露の玉藻いしかな

同 祢宜谷 弘化年間山崩して石木を数多穿つ。今に溪水濁り。

希有のことなり。

花はみなおろし大根となりぬれど

匂ひは四方に高き祢宜谷

紙子谷
意上奴神社
祠ハ森中ニ鎮座



【拾遺卷】

法美郡国府邑奥谷清源寺者池田家代々之墳墓也。猥不許一拜謁。当明治年間天下改革ニ依テ寺並衛士モ所廢今甲戌孟冬歩而涕泣礼拝ス。壯嚴結構驚バカリ。嗚呼。可レ惜。後数百年ヲ経テ廢墟タラシ事ヲ。短晷而悉曲ニ不暇。大概ヲ模写ス。

【拾遺三表】

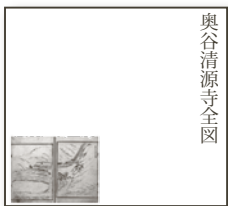
左方下向中ノ段

興禪院殿 前 因伯兩州

左横

仁厚院殿 前

奥谷清源寺全図



同	御墳左方下	栄岳院殿	正國院殿	義俊院殿	義運院殿	義観院殿	瑞徳院殿	孝徳院殿	真常院殿	炭叡院殿	広運院殿	停雲院殿	了義院殿	桂岩院殿	讓徳院殿	興禪院殿	仁厚院殿
---	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

右方下段

因伯兩州太守右近衛中將 耀國院殿 文政十三寅	因伯兩州太守羽林次將源朝臣綱清 清源寺殿 正徳元 七月 六十五	大隅守 享保七寅	成徳院殿	因伯兩州刺史源朝臣 元文己未年	天祥院殿	賢徳院殿	青嶂院殿
------------------------------	------------------------------------	----------	------	-----------------	------	------	------

左ノ上ノ方



前中太夫拾遺源朝臣宗泰

大広院殿 延享四丁卯	從五位下老岐守仲律 源朝臣 舜徳院殿	從五位下摂津源朝臣仲雅 賢量院殿	因伯兩州 岱嶽院殿 天明三卯	因伯兩州 大機院殿 寛政戊午	因伯兩州 真証院殿 文化四丁卯
---------------	--------------------------	---------------------	----------------------	----------------------	-----------------------

右表向

停雲院殿	前近江守朝散太夫源定賢
了義院殿	前河内守朝散太夫源清定
桂岩院殿	
讓徳御殿	前長門守 源定保
右横向	
広運院殿	前兵庫頭 源定就

炭礫院殿	前摂津守	源仲央
真常院殿	前主計	源澄時
孝徳院殿	右衛門督源朝臣治恕	
瑞徳院殿	右近衛権少将源朝臣慶邦	
義観院殿		
義運院殿		
正國院殿		
栄岳院殿		
自路右方下		
耀國院殿		
円徳院殿	故従五位下左衛門佐源清緝	安政戊午
左上方		
綱清法名清源寺殿因伯兩州太守羽林次将源朝臣	正徳元辛卯七月	
成徳院殿	前大隅守	源定得 享保七 寅
天祥院殿	因伯兩州刺史	元文己未
賢徳院殿		
青嶂院殿		
右上方		
大広院殿	前中太夫拾遺源朝臣宗泰	延享四丁卯
舜徳院殿	前従五位下壱岐守源朝臣仲律	
賢量院殿	前従五位下摂津守源朝臣仲雅	
奥中上方		
岱嶽院殿	因伯兩州	天明三卯
大機院殿	因伯兩州	寛政戊午

真証院殿 因伯兩州

文化四丁卯

・立ならぶみはかの石の燈火も消て寂しき秋の夜の月

○法美郡杉崎村民長右衛門 氏邸土居の端に井有。昔何人の致しけむ山下岩石を切抜井中石盤の如くニて旱魃ニも満溢す。一條の細流となり夏冷冬温なり。水底清らにして晶なり。他の水と秤量するに三分の一ほど輕し。此井を露の井戸と云て当国一の名水と村老の云なり。小泉丈賢の稻葉民談にきりの井戸其在処不詳名水なりと。昔鳥取城山ニ有と云へ共今慥に知る者なし。山上に岩を切抜たる大井有。是山伏井戸といふ。若是ならんか。切ぬき井戸と云。又桐の木井戸と云。又桐井と云歟。今山上城内に有井は備中守殿御時代掘給ふ由。水出かねて三年ニ稍水涌出るに到ると。扱は名水の名は只此杉崎露の井戸ならんか。露と霧の違ひならんか。

同 庄山村・赤禿山より香盒石を掘。数品。其二三を左ニ図。

- ・厚五厘。鉄色
- ・厚五六分。同色
- ・厚六分。同色

形 櫃 入 水 予が所置也。

- ・一花瓶。豎三寸余
- ・香盒。長二寸余
- ・長三寸余

是当国奇石の一なり。

同法美郡美歎村三谷山福田寺

観音堂。本尊八臂観世音也。往古ハ百町之境内ナリシ由。中古ノ乱逆ニ衰廃シ時彼本尊ヲ三谷川辺ノ柳ノ株ニ蔵ス。後年此柳川ニ横倒ル。村民是ヲ伐。株ヨリ芽ヲ萌シ花サク。雀群リ其花ヲ啄ム。数日土人其株ヲ見レバ観音像依然ト現在。其台座ノ銘ニ曰因州法美郡三姫村井垣八左衛門ト願主水礼源雲ト鐫刻ス。今ハ村ノ右山端ニ小堂安置ス。

・むら雀柳の花を啄でよりいと有難き跡は垂けり

同右ノ谷奥、腰折石尊 樹ノ孕ミトナリテ安ズ。何ノ世ヨリカ腰疾疝氣ノ人祈而多レ験。

・世を救ふ誓ひにこりし石仏 昔かたぎの内に籠りて



同法美郡 法花寺村

法花寺

大蘭若ナリ。境内ハ大領知四百町トアリ。当村福田某彼寺ノ礎ヲ手水鉢ニ而所持ス。

人皇 聖武帝天平十三年 十一月 詔 天下諸国ニ国別ニ令レ

造ニ国分金光明寺法花寺一。孝謙帝諸寺墾田ノ地ヲ定ラル。礎

多少鳥取常忍寺ニ送ルト云。彼ノ寺本堂ノ礎ニセシヤ。今明治甲戌七年迄凡一千百廿年計之古梵也。

・茂りあいし昔の園は荒果てはつかに残る法の花寺

同 国分寺村国分金光明寺址

本尊薬師如来座像。丈三尺計。古仏。

法花寺同時ノ草創。大梵宇ナリシ由。墾田四百町アリシ由也。今僅ニ草庵ヲ建ル。尼寺ナリ。往古ノ残ルハ堂下ニ五輪ノ碎経塔ノ石磨滅セル物而已。額面ハ「国分寺」清源寂潭書。

・黄金光る寺田の跡は今もなを昔の色に咲る菜の花

同 国府村端

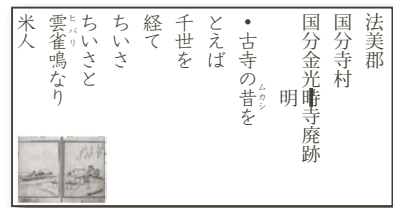
・無量光寺 浄土宗

是往古ハ大梵宇ナリシ由。今ニ国府村町屋村中郷村ナド数村咸檀家ナリト。

・はかりなき光を寺によばれてはつゝちの餅に春や飽覧

同 安徳天皇遷幸伝録

同岡益石堂同新井ノ石船同荒船崩御宮同姫路伝記



法美郡
国分寺村
国分金光寺跡
明



同 国府邑
無量光寺

人皇八十一代安德帝御宇寿永三 正月より文治三 三月末まで源平の戦に平氏ノ一門都を落去津ノ国一ノ谷に皇居す。于時源氏ノ大將九郎判官義経其勢二万五千余騎一ノ谷鉄城が岑嶋越より逆落ニ責て平氏ノ一門敗北し主上二位ノ尼前殿始メ不殘四国八嶋に落る。折節風波荒くて暫くためらふ処源ノ兵頻に攻戦ける故ニ平氏の一族各船に乗て散乱し或は豊前の田浦文殊が関又檀の浦赤間が関ニて船軍有けるが源ノ兵の勇勢に討敗られ平氏或は討死落去又は捕縛られて残るは入水したりける。茲に長門ノ住人紀伊刑部大輔道祐なる者新中納言知盛味方危と思ふより主上二位殿官女共自分の船に移し奉り三の嶋に落しける。越中治郎兵衛是を見て主上二位殿共に入水し給ふと披露しけるが当座に有合廿五人の兵共咸海に沈みける。中に悪七兵衛。越中治郎兵衛。伊賀平内左衛門。上総五郎兵衛。飛驒四郎兵衛右五人は水練達人ニて遙に流舟に取付遁れけるとかや。飛驒四郎兵衛上総五郎兵衛悪七郎兵衛は対馬へ漂流し盛次家

長は三嶋へ流れ同三月廿五日三嶋ニて刑部大輔道祐が船に移り高麗国ニ渡らん主上二位殿官女共ニ船を沖へ漕出し風に任せて落給ふ程なく隠岐国岩が崎へ御着船。折節風烈しく岸によれず遙に伯州の方へ漂流し夫より因州加路浦ニ着岸。于時風雨雷電天地鳴動するニ二位殿官女大ニ驚怖し唱名する。盛次家長も人々に力を合て漕よせんとすれども波荒く吹流れあわやと観念す。主上の宝剣を海ニ投じ龍神を祈念するニ不思議や俄ニ風静かになり盛次家長力を得て御船を汀に漕寄難なく湊に着ければ主上を始メ皆々陸へ上り加路に御着有。斯る処に光源院宗源と云和尚通りかゝる。盛次立よりて「御僧ニ尋問べき事候。此処は何国の浦ニ候哉」と。和尚答て「此処は因幡国加路浦と申なり」。盛次重て「我々は主人を伴ひ船ニ難風ニ流され難渋いたしあらぬ命を拾ひ只今此処に上り候へ共何国とも不知。行先爰とあてもなく十方にくれ殊更人眼を忍ぶ我々。何卒よき隠れ処を教へ下さらば広大の御慈悲とひたすら頼入」と懇懇に頼入ければ和尚つくづく見て暫く考へ云けるは「如何なる御方か痛はしや。見苦しなから愚僧が室ニ暫時御宿賃申さん」と。「是より三里奥岡益村と云在処。御苦勞ながら」と云ければ盛次家長も大ニ悦び「然らば御案内頼入」と。主上二位殿官女共伴ひ法美郡へ急ぎける程に夜四ツ時ごろに御着ある。此処に深く隠し奉る。二位殿限なく御悦喜あり。「此程の風波に御勞れも如何」と両臣も御機嫌を奉へ伺る。宗源種々饗し奉る。斯る処に梶原平三景時二千余騎ニて平氏は討散し主上二位殿一門の方咸入水と聞この旨鎌倉へ言上せんと大將に先達て長門檀の浦より石見出雲伯耆因幡へ着し同法美郡雨滝より十王峠より但馬へ通る道割ニ而途中谷村ニ小川あるニ俄ニ風

雨烈しく満水となり人馬通りがたく彼谷村へ陣を取り一夜明しける。翌日水尚高ければ村々へ申付階子を出させ継梯子にて同勢わたりけり。其時より此橋を梶原橋と名付と。扱谷村より岡益へは僅四五町計りすぢかひなれば大勢の声篝火の光誠に追手の軍勢と心得二位殿始め皆々驚怖しいかゞせんと騒がれる。和尚申けるは「是より南谷を御越えと峯寺と申処即愚僧が弟子にて候。一先彼地へ御忍あれ」と言上す。両臣悦び「然らば案内頼入」とこれより宗源先立皆々八東郡峯寺へ急がる。岡益より峯寺越を今も通り谷と云伝。帝忍び居給ふ処を西の宮と号す。其夜明れば四月十四日峯寺に入御します。両臣宗源を招き「貴僧の御高恩いかなることか。稍廿日も過ぬればよもや来るまじと思の外夜前の次第人馬の音又も追手の程はかりがたく遷幸し奉る処もなし。斯計り御運の末口惜さよ。此上も宜しく計い下され」と咸涙にくれてける。和尚暫く考へて扱「此奥山御隠処あり。是究竟の地。此地御忍あそばせ」と言上す。両臣も力を得「然ば又々御案内下され」と是より大坪市場福地麻生の村々を経て夜も八声の鶏頃朧月ニ而岩村より左一條途大深山谷川を蹠て柴踏分主上二位殿をも背負奉り官女はこけつ転びつ早明方に成ル。此処に暫と休み給ふ。此処を明なべと云けり。宗源師言上す。「是より廿五町北に当り瓢箪山とて袋の口の如く究竟の地あり。いざ御出」と伴ひ奉る。程なく峯ニ上り又十八町下り見れば清水流れ有て五町計りの平地鉢の底の如く岑より谷へ大樹茂り類なき御隠処なれば両臣も悦び此処仮の宮造す。柱は松丸太屋根は松杉の葉にて葺き壁は杉の葉重床は竹すのこ草庭。俄に御造営成就し皇居を構へ深く隠し奉る。帝も叡感斜ならず二位殿

も御悦限なし。盛次家長和尚に向ひ「誠に貴僧の高恩海山つくし難し。主上を休奉り此処遷幸仕る。君も叡感我々が慶也。大謝も不致かく今の身の上重而謝礼。先々帰院下さるべし」と云へば宗源涙を流し「御飲こそ有がたけれ謝儀など思ひも不寄。此山中御仮住居奉二恐入。是より穀塩菜等送奉らん」と。又「谷道往來も密作らせ申さん。必御心安く思召給ふべし。御遠慮なく仰付あるべし」と懇に言上す。二位殿始め「猶も宜しく頼申。只貴僧の御恵なり」と。宗源涙を押へ御暇乞し帰ける。尼前は跡見送り給ひ「誠に彼師の蔭て君を隠し奉る。最早追手の患もなし。此上は君を守護し兎角時を待ん」と御詠歌

古への月にたぐへし君なれど其光なしみ山への里

扱両臣御殿を繕ひ或は立具諸具を調へ或は天奏賄ひ役勤め世話しき月日を送りけり。嚴暑の時御機げんいかゞと草木の花を採覧に備へける。折から宗源師食物品々取揃へ伺ひ奉る。両臣「先こなたへ」と請じける。宗源謹で御きげんを伺恐悦を申上「扱此酒は供白髪と申故捧る」と。両臣悦び「扱々今に始め御厚情。毎度万品送下さる。殊途も造り被下君は素より我等迄満足。扱拙者此頃若桜の町ニ参り咄を聞ば此節都は騒しく軍あると。貴僧は御聞あるや」と尋問。宗源答て曰ク「去ル三月より大将兄弟軍起り義経は吉野へ落給ふとの噂。扱々世上は旦に替り夕に變ず。何事も因縁依」と四方八方の咄早七ツ時なり。御暇申上心残して岡益へ返りける。扱も盛次は右衛門督殿其外捕れし人々の都て如何渡候はんやと一先都に上り委く聞んと奏問し急ぎ上京いたしける。扱八東より若桜より但馬丹波亀山にて茶店ニ昼飯せんと座敷に到る。亭主に

都の噂を聞けるに主の曰「扱々騒がしき世の中。三年已前は源平の戦去ル三月平氏皆亡び中ニも宗盛父子は都三條の西に当六月廿四日獄門に首をかけられ後に首は大海へ投じけると。古へもなき例なり。又引統都の騒動。梶原が讒言ニ而頼朝公御怒強く義経殿追討とて鎌倉より三万騎上ると聞。義経公より起請文等出し給へども赦免なく依之吉野へ引退給ひ又蝦夷へ落給ふと噂。又蒲殿頼朝も御疑ひかゝり又いろいろ起請文を出されても聞入なく痛しや御自害めされしと。何事も宿業のなす処。平家の報ひならん」と咄ける。盛次無念の思ひを懷きながら「扱々珍しき咄。是国元の土産ニせん」と茶代をおき立出てける。扱瓢箪山の内裏ニは八朔の御祝義とて木太刀を作り給ふ。○君住めばこゝも雲井の内なるをなか恋しき都成けると詠歌ある。扱都の便りを待給ふ処ニ盛次立返り言上しけるは「大臣殿御父子去ル六月廿四日大路を渡され首は獄門にかゝり給ふと。口惜き次第也」と語れば二位殿御泪ニむせび給ひ「浮世のさまとは言ながら古入道殿は苦痛の病死。其上子孫の有様残念也。是につけても重盛は聖人かな。平氏の滅亡不遠と未前に悟り一命を神捧病氣託し唐土医王山へ祠堂金とて弥平兵衛宗清ニ持せ渡されし」と披露し「宗清に武を止させ一門の跡弔ひ致し呉よと言置しを今はの時ニ此母へ他言無用と言置しが微塵も違はぬ今の有様。如何成因果の報ぞ」と深く泪に沈み給ふ。人々共に歎きける。尼前は泪の下よりも両臣を召「稍国も治り隠家を知る人もなし。宗清が行衛を採し心を合せ摂州兵庫の築島ニ埋置用金三千兩築地の大柱ニ金の網金鎖ニて繋ぎ有ば兩人の知る処急ぎ彼地へ到り用金を採取持返るべし」と宣へば両臣畏り旅用意し隠家を立出ける。扱

も宗清は重盛公の命を蒙り御逝去の後高野山へ登り奥ノ院ニ而剃髪し西蓮と法名し常念仏にて居たり。其後御一門討死と聞より那智山播州摂州に忍びて石碑を建造善供養し頃ハ八月十一日ニ御一門の三回忌追善の為黄金十枚津の国摩耶山天王寺へ持参し大施餓鬼を修行す。素より無縁供養として世を憚りける。扱盛次家長は義約し西ノ宮にて出合イ家長言けるは「宗清は日本中を尋る共知れがたらん。夫より用金を持返るを一刹那も早く工風せん」と。盛次も尤と同意し併大金故兩人持返んもおぼつかなし。摩耶山天王寺は主家へ因縁あれば密ニ住持を頼み置黄金を運ばんと急ぎ摩耶山へ登れば此日は夥敷群集なれば忍んで人ニ紛れて居る。寺中大騒ぎせがき柵ニ万燈照し有ル。念仏読経殊勝なり。時に西蓮兩人をつくづく見て密ニ客殿招き住主に斯と云ければ直ニ方丈へ招き入。盛次家長大きに悦び互に膝付合積る話に無念の泪せきあえず。盛次泪を押へ「此度二位殿より貴殿の行衛尋ね参れとの御説にて兩人方々探索めしが影も不見。兩人も十方にくれ当寺へ参し処不思ぎの対面満足せり。是より三人合し二位殿御心を安んじ奉」と御用金を取打連立て返んと兵庫に趣夜半の頃築島ニ到大柱の元の金を取上人目を忍び又天王寺へ運び因州へと持返る。三人諸共御前へ黄金を捧ける。尼前金を納給ひ「扱珍しや宗清兩人に聞し如一門不殘討死の時今一度主上を世に立奉らんと惜からぬ命長らへ此山奥へ身を隠し浅ましき我身哉。広き世に住家もなく果報拙き有さま哉」といとゞ泪にむせび給ふ。一座人々西蓮も共に言葉はなく計。稍有て申上るは「先以御安泰の竜顔を拝し奉り大慶至極。去ながら御一門南海にて討死長門赤間が関にて御入水と承り候。此度摂津摩耶山にて御三回忌

の供養仕^ル。十一日より十七日施^セがき修行仕^リ。素より忍びのみ故無縁と仕黄金十枚寄付仕^キ。御菩提^{ボダイ}を弔^トひ奉る。然るに兩人^ニ出合委細承^{ウケ}。恐入奉^リ。悦候^{ヨロコビ}。下拙も武を捨惜^{ゲセツ}からぬ存命^{ボンメイ}し御遺命^{ユイメイ}を蒙^{カフ}り御先祖御一門の御石碑^ヒを高野山那智山播州摂州所々に建立し暫時高野の奥^ニて薙髪^{チハツ}し西蓮と法名仕常念仏^ニて候が此処^ニ御座とは夢^ニも不^レ知。未来^{ミライ}にて披露申上^{ヒロウ}んと奉存処^ニ尊貌^{バウ}を拝し大慶此上なし」と申上る。二位殿泪と共に「已後は三人心を合せ宜^{ヨク}く頼む」との給ひける。扱頃は十一月下旬大雪降積る寒国の事故一丈余り御殿も埋^{ウツ}れ昼夜を分ず。二位殿の給ふやう「主上御身の末も知れ給はずと泪ながら思ひ出せば唐土周文は山水^{コノリモテアツ}ヲ弄而仁を知^{モテクニシ}ると。夫引替此山中鹿猿を友とし雪氷を翫^シぶ。昔の錦衾も紙子夜着縞布子竹のすのこに敷^シねも草筵ぬれの木椀丸太切火鉢^シあらぬ囲炉裏に焚火し寒を凌^シぐ屏風代りの大雪は見もせぬ鄙^{ヒナ}の御住居也」と身を恨み世を怨^{ウラ}み給ふ。主上御泪ながら「是朕^{チン}が不徳^{フトク}のなす処。又も帰京し即位せば人々に加増せん。夫迄はよく頼むぞ」との給ひければ皆々泪にかきくれて恐入てゐたりける。

頃は正月初なれ共夢うつ、ニ暮

て寿^{コトバ}き祝ふ事もなく雪の中共^ニ集り昔語に日を送る。西蓮は明暮念仏の外なかりける。程なく雪解^ト木の芽^メだち花盛^{ザカリ}とも成ぬれば主上尼前も御覽^{ラン}じて御慰^{ナカミ}も多かりける。頃^{ヤガ}而六月半となり宗源師出きたり。盛次立出誘^{イザナ}へば和尚言上するやう「頃^{コノ}大暑の節御きげん克恐悦^{イタリ}の至^ニぞんじ奉る。扱此瓜茄子愚僧が寺内^{ウリナス}ニ作り候。鹿末ながら捧候」と。盛次悦び「毎々の御深切君も御称美^{セウビ}まします。我々も難^レ有存候。時^ニ先達て古朋輩御用金持参仕主上尼前^ニも御安堵^{アンド}なさ

れ時^ニ御謝義^{シヤギ}の為君より些^{スコシ}少なれ共拙者伺^シコウ致候処折節御光来故万々御礼申述との勅定なりと。黄金廿枚御請下されよ」と差出^{サシ}す。宗源あきれながら謹^{ツシシ}て拝受^{ハイジュ}し「思ひがけなき黄金有がたく仕合。辞義は返^ギて恐有」と三拝し暫^{ハヤ}く四方八方の咄^シ御暇申上返りける。扱主上「朕^{チン}は熊猪^{クマイ}の如くこの深山^ニ隠れ何見る事なく長々の月日を送る。早秋も過ぬ。景色^{ケシキ}のよき地や外^ニある」と仰有。頃は八月十三日。此辺に萱野郷荒舟の奥によき地有と言者有。尼前^{ニゼン}を始皆々奏問申ば主上歡喜^{エイカン}ましし即時^ニ盛次家長供奉仕^リ二位殿官女も付従^{シタガ}ひ西蓮留守居仕扱彼地へ行幸なる。高岑を越広き平^ニ到る。誠に絶景の地^ニ御休^{ヤス}ひ給ふ。四方觀覽あるに東は但州西は伯州の山々北^ニ蒼海隱岐ノ国遠帆の影。二位殿始め供奉の人々興を催し色々御物語有ける処如何したりけむ俄^ニ主上御腦煩なれば咸々驚きぬ。盛次懷中より氣付葉など差上奉る。家長は医師へと道なき処をたどり行。尼前殿泪ながら膝^{ヒザ}を御枕^ニして如何御介抱し給ふ。主上御眼を開き給ひ「水を」との給ひて終にあるなく崩御^{ホウギヨ}し給ふ。御寿僅十歳。文治三年 八月十三日なり。憐と云も愚^{ヨロカ}なり。家長も立歸^{カヘ}り皆々御尊骸^{ガイ}にすがり付涕泣^{ナミダ}ノ限りなかりける。二位殿御泪ながら「今日の御幸は三年越の事。よき御遊興^{ユウキウ}と思ひの外斯^{カク}あらんとは露知らず。今一度御世に立んと思ひしは皆水の泡。如何なる宿業^{シュクガク}因縁^{インエン}ぞや。我身も共に」とどふと臥前後^{フカト}不覺に見へ給ふ。人々一度に声を上^{ナゲ}歎^{ナゲ}給ふぞ哀れなれ。盛次泪ながら西蓮に斯と知らせ招きければ西蓮泪にむせび尊骸にすがり「是非もなき御有様」と念仏焼香^{セウキョウ}し奉りやがて御葬式^{ソウシキ}の用意致さんと宜き場処を見立石を集め御尊骸を隠^{ウツ}し埋^メ奉る。彼宗源和尚も手伝^{ツダ}ふて懇に奉弔^トけるぞはかなけれ。夫より此処

を崩御が平と言伝今以崩御の跡ニ三尺余の小池有。此池を帝池又平家池と言ふ。是尼前の主上へ水を捧給ふ跡也。扱八月の事なれば七々日の間尼前官女三臣共に毎日参詣し給ふ。西蓮昼夜法華經誦しける。総而帝の御在処を都と称す。故に私都谷と書始ける。姫路村は官女の住居し給ふ故の名也。此処ニ大森有て五輪数多破損し草に覆れたる。是西蓮や官女達の墳墓なり。当村昔より氏神なし。春秋彼岸の入り氏祭する。則崩御の日を祭る也。文治三年冬より四年の秋迄ニ岡益村山^{西ノ帝}に豎一丈幅式間四方の石室を造営し内に石の櫃を彫刻し其中に入る品物知る者なし。是主上の御遺物也。此処を御霊場とし御一周忌は此処ニて宗源師大施餓鬼修行ある。二位ノ尼前官女共皆々通夜唱名懇に弔ひ奉る。又二位殿は同郡吉野村光良寺を再建し本尊脇土諸仏再興し給ふ。是帝の御菩提なり。又四尺寸寸の鐘を鋳る。中に平氏の名を彫表に西蓮と彫付る。本名弥平兵衛宗清と有リ。尼前此寺に住持し念仏して御一門の菩提追善供せられける。此吉野村花度山^{クハド}光良寺は昔和銅二年秋当国高草郡加路の住人伏野三郎七と云長者遺訓ニ依而建立す。七堂伽藍三門金閣無量塔備し大寺国中第一の名跡也。領田貳百町即花度寺田と今に字する由。本尊藥師仏。御丈式尺。諸仏体共行基僧正の作なり。行基は天平勝宝三年僧正官を授り日本遍歴し給ふ大知識ニて和泉国大鳥部の産也。天平宝字四年遷化す。御歳四十七なり。扱天曆三年 兵乱に当寺物押領せられ伽藍不殘焼失し仏体は残り山の如く積て草むらの中に埋伏し跡のみ残りぬ。可惜哉。彼伏野長者も後延暦三年より七度の兵乱に財宝を奪掠^{ダツリヤウ}され後度々賊党の為に焼失し子孫^{コノ}に滅亡しぬ。後元龜三年の頃尼子家臣山中鹿之介幸盛当国巨濃郡浦留

相山の城に籠り国中の寺社及在々の民富の金銀財を奪掠し近郷の諸城を攻取又法美郡^{コシキ}龜山に城を構へ烏帽子尾の城を攻落勝誇りし処京の味方より招きし故先上京す。国中の者鬼神鹿返りしと皆悦び居る処又々天正元正月尼子晴久公を大将ニて大軍再起し僅二十日余り十三城を拔又武田豊前守高信を攻從へ鳥取久松城へ籠る。八東郡鬼が城 私都市^{キサイチ}市場城を責る時ニ法美郡吉野藥師^{光良寺}に伏勢を隠し置て私都へ責入ける。然るに市場の城兵斥候の者は是を聞付夜中火を放ちける故堂宇不殘灰燼となる。本尊仏体も徒に土中に埋覆無住無縁と成ける。可惜哉千年の梵于忽ち断絶す。扱出雲国富田の城主尼子晴久雲云作因伯播備中前総て十一州の太守たりしが永禄五年十二月病死嫡子大夫義久家督す。其後毛利元就公の為に微々と成を無念ニ思ひ諸士永禄十二年 公を大将とし軍師山中鹿之介憤発し山陰山陽に戦ひ再び雲州富田の城に帰城す。諸士も悦び公も感悦有レ之。万端幸盛が肝胆を砕く効ニよる。誠に武威^{ブイ}山陽陰に赫かす。然るに微運ニ而後毛利の為に尼子勝久^{孫四郎ト稱ス}播州三日月の城ニて滅亡。天正六年七月十二日山中幸盛三十九歳ニ而自殺す。後慶長五年池田三左衛門輝政公御弟池田備中守長吉当国主と成給ふ。其時御巡国ニて此吉野村藥師堂跡仏像の山の如く積るを御覽有て不審に思召御尋問有けるニ大山源門寺滝本法印出て昔の口碑縁起の旨申上再建の義ヲ願ければ歎はしき事ニ思召修理料として玄米五石仰せ付られ堂宇仏像再興しぬ。後元和三年松平新太郎光政公因伯の太守たり。後寛永九年松平相模守光仲公備前より御国替ニ而国務相統寄付も転廃しぬ。依而源門寺瀧本坊住す。側に正学院と云位有る。呼鳴世の榮枯盛衰。悲哉。彼二位尼前は文治四甲秋泉が谷と云処ニ豎六尺

五寸幅一丈深、丈余の石櫃を作らせ又一ツの石櫃側に置我身の果て

行処と定て小堂を建万年山天徳寺と号西蓮をして常念仏させる。後

建久三壬子八月上旬より尼前病臥て官女三臣等驚き医師薬と

介抱す。薬も飯も上り給はず只一心念仏唱へ終に八月十五日往生な

し給ひける。皆々歎きけれども其かひなく終に泉が谷石船の側に尊

骸を葬奉る。宗源師懇に追善回向して弔ひける。扱石船の水毎々

濁ず清ず満濁せず。古今同じと。泉が塚とも云。村名も扱て二位な

るを字を憚りて新井と改。扱尼前逝去の後、三臣岡益新井吉野の三

村に住居し官女は姫路村に住居し尼前の三周忌大法事を仕り宗源師

を招き追福作善し光良寺に祠堂金十枚寄付し夫々懇に致し西蓮は高

野山那智山四国八嶋摂州長州へ祠堂金奉納し又岡益石堂二位石船吉

野薬師堂祠堂金又姫路五輪数多皆先祖官女達の五輪も建置。御

用金残りは官女達へ配分し三年が間三ヶ庵にて念仏し後越中四郎兵

衛盛次○伊賀平内左衛門家長は但州二万郡御崎村対田村辺に住居し

子孫今に残れり。抑二位尼前は平相国清盛公簾中也。清盛安芸守の

時厳島明神の神貌を拜んと三七日参籠す。明神即二八の美女と

現じ給ふ。公是に恋慕の心動く時に大龍と化し給ふ。公驚怖して託

するに大造宮すると。依て後に社壇回廊莊嚴を尽し神罪を謝し給

ふ。元来清盛御息女を高倉院の中宮立て建礼門と号し皇子御誕生

の若宮へ強て御位を譲り安徳天皇申奉る。其身御外祖父たるより

大臣を経て太政大臣又大相国入道浄海と成て一門高位高官に昇進し

奢侈を極て一天下を掌握し民をげ神明仏陀の明鑑にぞむけば僅廿

余年の栄花忽衰微す。今明治八乙亥迄文治三末年より七百年余

【拾遺 八三裏】

○三本松は法美八上両郡界。往古二本宛両方より植ける由。一木二
股と成故二三株となる。世々の材も洩て幾世を経るも昔なつかし。